

# 清代八股文における八股（提股・出題・ 中股・後股）と收股について（5）

The Eight Legs (Initial Leg, Revealing the Theme, Middle Leg, Later Leg) and Summary Leg of the Qing Dynasty Eight-legged Essay (5)

滝 野 邦 雄  
Takino, Kunio

## （ii）『讀書作文譜』

唐彪は『讀書作文譜』（康熙三十一年〔一六九二〕刊）で、対句となる二股が不揃いでもよいのか、起・承・轉・收を全篇を通じて展開するのか、股の中で展開するのかについて、また、柱を立てる方法や合掌を避ける方法などについて述べる。

まず、対句の不揃いについて説明し、対句となる二股において、虚を先に持ち出して實（寔）で対応させたり、出比と對比とが不揃いであるのは、規則から外れるのではないかと、設問を立てる。

（1）『制藝綱目』によれば、題目の文字を用いて句作りをするのを實といい、用いないで句作りするのを虚という。

虚實疏とは、虚を以て實に對し、實を以て虚に對するなり。題中の字有るを實と爲し、題中の字無きを虚と爲す。凡そ段落題の語句の參差ある者は、股中に必ず虚實疏の法を明らかにすれば、方に能く對仗 整齊（きちんとなる）となる。馮具區（馮夢禎）の「何如斯可謂士」（『論語』子路）三節文の如きは、後二比に「義之是非可否，不暇計矣」を以て「稽之宗族鄉黨無間然言矣」に對す。此れ虚を以て實に對するなり。〔また〕股末の「可以其硜硜之小人而棄之也哉」を以て、「可以其設施之未究而少之也哉」に對す。此れ實を以て虚に對するなり〔滝野注：太字で示した部分が題目にある實の文字である〕。〔割注：然れども惟だ段落題①のみ此の如きくす可し。二比共疏一句の若きは、題外の字を以て題中の字に對す。便ち訓を爲す可からず。先正 往往之有りと雖も、終に正法に非ず……〕（『制藝綱目』不分卷・六十三葉～六十四葉・「虚實疏」条）。

①段落題：『制藝綱目』に「段落題とは、題の自ら段落を分かつ者なり。或いは平列、或いは串遞、或いは參差〔割注：意の對して語句の對せざるを參差と爲す〕。兩段より以て九段に至るは皆な是れなり〔割注：九段以上は長題に屬す〕……」（『制藝綱目』不分卷・十五葉・「十曰段落題」条）

唐彪 曰く、或いは問うて云う、馮<sup>ママ</sup>巨區（馮夢禎：字は開之，号は具區。浙江秀水の人。嘉靖二十五年〔一五四六〕～萬曆三十三年〔一六〇五〕。萬曆五年〔一五七七〕丁丑科二甲三名の進士）の「行己有恥」（『論語』子路）三節題①の其の第二節の出股に「蓋稽之宗族鄉黨無間然言矣」と云い、第三節の對股に「蓋義之是非可否，不暇計矣」と云う、是れ反って〔對股の〕虚を以て〔出股の〕寔に對するなり。瞿昆湖（瞿景淳：字は師道，号は昆湖，諡は文懿。江蘇常熟の人。正德二年〔一五〇七〕～隆慶二年〔一五六九〕。嘉靖二十三年〔一五四四〕甲辰科の會元・榜眼）の「使禹治之」（『孟子』滕文公下）一節文の出股に「觀之江淮，而江淮此地中行也，觀之河漢，而河漢此地中行也」と云い、對股に「以類聚而不爭於民之所食也，以羣分而不爭於民之所居也」と云う。此の對〔股〕 既に虚にして復た參差<sup>ふぞろい</sup>あり。諸を對偶の法に<sup>はか</sup>揆るに、合<sup>は</sup>わざるに似たり、と（『讀書作文譜』卷之九・二葉～三葉・「對偶不同之故」条）。〔滝野注：太字で示した部分が題目にある實の文字である〕。

①『可儀堂一百二十名家制義』（卷之二十・二十四葉・「馮具區稿」条）

には、題目は「子貢問曰 三節」とする。

それに対して唐彪は、兩句題・兩節題と一句題とは、同じものではない。題目の内容が異なっているのだから、虚で實（寔）に對するの<sup>も</sup>かまわないし、對句は必ずしも一致するものではないという。

余（唐彪） 曰く、凡そ兩句〔題〕・兩節題と一句題とは同じからず。題義既に異なれば、則ち對股の詞句 題に隨いて施し、盡く前比に合う能わざるは勢い①なり。故に虚を以て寔に對するも可なり。前 短くして、後 長し・前 多くして、後 寡なきも亦た可なり。近時の名公の單題の對偶は齊整<sup>そろ</sup>わざるもの多し、何ぞ況や數節文をや。若し對・比の字句を以て前の如くする能わず、反って前比の好き意を將<sup>も</sup>って改め去れば、文をして題と相い稱せざらしむを致す。是れ小節に因り其の大端を失うなり。可なるかな、と（『讀書作文譜』卷之九・三葉・「對偶不同之故」条）。

①勢：武之望（字は叔卿，号は陽紆山人。陝西臨潼の人。？～一六二九年。萬曆十七年〔一五八九〕己丑科三甲百三十八名の進士）の『舉業卮言』に「茅鹿門（茅坤：字は順甫，号は鹿門。浙江歸安の人。正徳七年〔一五一二〕～萬曆二十九年〔一六〇一〕。嘉靖十七年〔一五三八〕戊戌科三甲百七十一名の進士）先生云う，勢いとは一篇の呼吸の槩（根本）なり。大將 百萬の兵を提<sup>す</sup>べ以て合戦するに，其の要は只だ勢いを得るに在り。勢いを得る者は，百戰百勝す。學者の文を爲すも亦た然り……大畧 善く兵を將<sup>ひき</sup>うる者は，百萬の兵を操<sup>あやつ</sup>ること，左右の手の如し。善く文を爲す者も數千百言を累<sup>かさ</sup>ぬること，喉を探りて出すが如し。舉業も亦た然り。其の勢いを得れば則ち題を相<sup>み</sup>て情に沿<sup>そ</sup>うこと，風の雲を掣し，泉の峽に出るが如し。蘇文忠（蘇軾）の所謂ゆる「其の行なわざるを得ざる所を行ない，其の止まらざるを得ざる所を止む」（この引用文は，蘇軾の文集には今のところ見い出せない。ただ，元・劉將孫の『養吾齋集』卷十一「從孫千林小草序」に「東坡所謂」として引用される）と，是れなり。其の勢いを得ざれば，則ち語意 窘澀（窮屈）にして，之を扣けども「聲を成さず」（『禮記』檀弓上）」（萬曆二十七年〔一五九九〕序『舉業卮言』卷之首・三十二葉～三十三葉・「勢」条）。

また，唐彪はどの箇所<sup>ママ</sup>で起・承・轉・收を展開すればよいのかについて，吳侶白の発言を引用する。それによると，明末清初以前は全体を通じて起・承・轉・收を展開していた。ところが清の康熙年間になると，句の中で起・承・轉・收を展開するようになる。しかし，これでは句が四つに分断されてしまうので，必ず行なわなければならないということはないとするのである。

吳侶白 曰く，前輩の文，一篇の中 多くは十数股なる者有り，其の股體短ければ或いは四五句，或いは五六句，本股は起・承・轉・收無く，通篇を以て起・承・轉・收と爲すは，其の體 圓①に，其の神② 雋③にして古文の意有る所以なり。今の長比の排偶の若く自<sup>ごと</sup>ずから起・承・轉・收を爲せ

ば、則ち四比 四截と成りて、神氣 貫かず、全く古文の意無し。然らば則ち今の一股の内に四法を求むるを専らにする者は、以て必ずしもせざるなり、と（『讀書作文譜』卷之九・十葉）。

①圓：薛鼎銘（字は葦塘。江南上海の人。乾隆二十八年〔一七六三〕癸未科三甲二十九名の進士）輯著の『墨譜』に「圓とは、題目を將<sup>も</sup>つて團結（散らばった物が集まって丸くなる）するを謂う。題 圓にして而<sup>しか</sup>して文の圓も亦た之に因る。○題に數句數字有り。若し逐句ごと逐字ごとに做せば、則ち板滯（融通が利かない）して圓ならず。題の一句を拈（つまみ出）して以て數句を貫串（a）す・題の一字を拈して以て數字を貫串す、或いは題の一句の意を數句の中に運ぶ、或いは題の數句の意を一句の中に併せば、則ち運置變動して圓なり……」（『墨譜』卷之一・十七葉）。

（a）貫串：『斯文規範』に「題中の一兩箇の重き字眼に靠住し、全題を將<sup>も</sup>つて俱に一兩箇の重き字に従いて貫串<sup>ゆ</sup>し去くを言うなり……」（『斯文規範』卷之五・四葉・「一曰貫串」条）。

また、『夢雲軒管見錄』に「題の當に斡旋（a）すべき者は、則ち斡旋し以て之を圓とす。所謂ゆる「筆 造化を補うて、天 功無き」（李長吉「高軒過」詩）なり。題に輕重無く頗る散漫・板重・煩碎（煩雜で煩わしい）なる者は、則ち當に其の散を截ち、其の板を化し、其の煩を括し、之を迴環（b）映帶（お互いに引き立たせる）の法に行なえば、篇法（c）をして圓轉せしむるなり。用筆の圓に至れば、則ち珠の盤を走るが如く、彈の手を脱するが如し。面面周到にして、

✓（2）明の武之卿は古文の法に則ると、格調が卑俗にならないという。

文字 未だ古を法とせずして得る者有らず。時文を作ると雖も、亦た必ず法を古文に取る。然る後、格 卑しからず、調 俗ならず。蓋し文字の骨格・調法 盡く之を古文の中に備う。古文を讀まざれば、即ち俗氣稚氣 脱する能わ<sup>ため</sup>ず。安くんぞ卓識高論有るを得んや。噫、此れ「好學深思」（『史記』五帝本紀論）なる者の爲<sup>ため</sup>に道<sup>い</sup>う可く、「寡聞淺見」（『史記』五帝本紀論）なる者の爲<sup>ため</sup>に言い難きなり（『舉業卮言』卷之一・十九葉・「擬古」条）。

絶えて黏滯（滞留）の痕無し。佳しと爲す所以なり」（『夢雲軒管見錄』卷七・制藝總論・六葉・「圓」条）。

(a) 幹と補とは同じからず。補は乃ち題の應に有るべき所を補す。

幹は則ち題の闕陷（不十分）なる處有れば、須く與に篇中の載せる所を幹旋（対応）すべし、是れなり……（『文法一揆』卷四・十二葉・「幹」条）。

(b) 迴環:「迴環」ではなく「回環」となっているが、『制義綱目』に「回環は、題に二意有り、上を帶びて下を疏し、下を疏して上を顧みる、是れなり。滾題の後半、之を多用す」（雍正六年『制義綱目』不分卷・六十三葉・「回環疏」条）。

(c) 篇法: 篇法は、製錦の如し。要は絲理の分明するに在り……（袁黃『游藝塾續文規』卷八・三十二葉）。

②神:『舉業卮言』に「夫れ神とは何物なり。「水中の鹽味、色裏の膠青」（『景德傳燈錄』卷第三十「傳大士心王銘」）の如し。之を睹るに形を見ずと雖も、以て形無かる可からず。而れども其の有るに非ずと謂うなり。即ち身を以て喩うれば、四肢九竅 形を以て用いるなり。皆な神に恃みて主宰と爲し、神無ければ、則ち耳目は視聽に孰與ぞ、手足は持行に孰與ぞ。形 悉く委形（a）なるのみ。故に神の文に在るは、形無きなりと雖も、能く形を形とす。血脉の之を得て流貫し、筋骨の之を得て聯屬（連なる）す、色澤（色合い）の之を得て光潤（つやつやする）す。以て氣の之を得て運行し、機之之を得て動盪（揺り動かす）す、意の之を得て融洽（融合）す、詞の之を得て暢達（なめらかに通じる）するに至るは、皆な是の物なり。文にして神無ければ、殆ど枯槁の木の如し。枝幹 存すと雖も、生意 已に散ず。沉痼（長患い）の人 眉目 具わると雖も、精氣 屬せず。即ち燦たること雲錦の如きも、皆な卮詞（随意の言葉）贅語（無用の言葉）なるのみ。何ぞ貴ぶに足らんや（『舉業卮言』卷之首・一葉・

「神」条)。

(a)『莊子』知北游に「舜 曰く、吾が身、吾が有に非ざれば、孰か之を有せんや、と。曰く、是れ天地の委形（借り物）なり……」。

③雋：『斯文規範』に「雋の字に兩つの意有り。一に云う、鳥の肥え、肉の肥える者 之を雋と謂う。則ち之を文に通づれば、凡そ文中の辭調の肥澤なる者は即ち之を雋と謂う、後〔の『斯文規範』で言及する〕豊滿・豊厚と名を異にするも實を同じくす、と。一に云う、雋と俊と同じ、蘇綽の傳に曰く「萬人の<sup>ママ</sup>秀を<sup>ママ</sup>俊と曰う」と (a)、既に之と同じ。則ち凡そ文中の「美秀にして文なる」（『春秋左氏傳』襄公三十一年）者は、之を俊秀と謂う可し、亦た之を雋秀と謂う可し、又た秀致と名を異にするも實を同じくす、と」（『斯文規範』卷之七・三十二葉・「一曰雋致」条）。

(a)『周書』（卷二十三・蘇綽傳）・『北史』（卷六十三・蘇綽傳）に「古人 <sup>いわ</sup>曰く、千人の秀を英と<sup>い</sup>曰う、萬人の英を雋（『北史』は「雋」に作る）と<sup>い</sup>曰う、と」。

こうした考えに対して、明の武之卿は『舉業卮言』で、次のように述べる。

大抵の股法は起承轉合（收）の四者より出でず。然れども起と承とは、勢い疎なる容<sup>べ</sup>からず、轉と合とは、機 斷なる容<sup>べ</sup>からず。其の要は只だ圓融（隅々まで周到である）に在るのみ。嘗て弄丸（熟練しているもの：『莊子』徐無鬼にもとづく）を觀る者は、其の起伏應接の妙・轉移收合の神を見て、因りて文の股法を悟る、猶お是のごときなり。獨り股法のみならず、即ち篇法も亦た此の如し。是れ善く悟る者に在りて之を得（『舉業卮言』卷之一・三十四葉・「支論」条）。

すると、明代においても、起承轉合（收）を用いて股を作成していたようである。

また、明末清初の施閏章（字は尚白、号は愚山。安徽宣城の人。明・萬曆四十六年〔一六一八〕～清・康熙二十二年〔一六八三〕。順治六年〔一六四九〕己丑科二甲二十六名の進士。康熙十八年〔一六七九〕己未科博學鴻儒第二等四名）

も、次のように言う。

中股……復た起承轉合（收）無ければ、心腹空虚なり（試院冰淵「豫闈公約」）。

さらに言うと、本稿（1）形式のところで検討してきたように清代の八股文では中股で起承轉合（收）の形式を用いことが多かったようである。

続いて、唐彪はいわゆる股の柱の立て方について、梁素治の発言を引用する。

梁素治 曰く、分股の立柱は、毎に股首に於いて或いは一意を創る、或いは一字を拈（つまみ出）す、或いは一事を提し、用いて一股の綱領と爲す。股中の意義は、即ち此れに依りて之を發す。題意に従いて柱を立つる者有り、理學題の致知・力行を用いて分股し、仕進題の致君・澤民を用いて分股するが如し。題面に従いて柱を立つる者有り、「忠信」題の「忠」・「信」を以て分股し、「致中和」（『中庸』第一章・第五節）題の「中」・「和」を以て分股するが如き。註語に就きて柱を立てる者有り、「夫何爲哉」（『論語』衛靈公）題の「朱注の」「紹堯〔之後〕」・「得人〔以任衆職〕」を以て分股し、「至道不凝焉」（『中庸』第二十七章・第五節）題の「聚」字・「成」字を以て分股するが如き、是れなり。上を承けて柱を立つる者有り、「奚取於三家之堂」（『論語』八佾）の如きは、[上文にある]「天子」・「辟公」を以て分股とす、是れなり。先輩 文を爲すに嘗て此の法を用う。之を總じて、實もて題理①を疏し②、虚もて題情③を引く④、此れ分股立柱の意なり、と（『讀書作文譜』卷之九・十葉）。

①理：『舉業卮言』に「陸士衡（陸機） 云う、「理は質を扶<sup>たす</sup>け以て幹<sup>みき</sup>を立つ」（「文賦」）と。則ち文の理有るは、乃ち文の立つ所以なり。天地の間、物の理無きもの無し。即ち木石の蠹<sup>おろか</sup>然なる者なるや、中に亦た各々理有り。木 理無ければ、則ち枝幹 以て植える無し。石 理無ければ、則ち脉絡 以て分かつ無し。文字 理無ければ、則ち格 何を以て立たん、詞 何を以て正しからん。吾れ謂う文の理有るは、猶お人の心有るがごとし。人 惟だ心有れば、始めて以て衆形

を役使するに足る。然らざれば、則ち渙散（分散）して統無し。文の惟だ理のみ有れば、始めて以て詞格（詩文の品格）を主張するに足れり。然らざれば、則ち枝蔓にして當無し。故に理の文章を貫くは、猶お心の氣體を帥<sup>ひき</sup>いるがごとし、一定にして離る可からざる者なり（『舉業卮言』卷之首・十八葉・「理」条）。

②疏：『制藝綱目』に「疏とは疏して之を通ずるの謂いなり。亦た疏して之を明らかにするの謂いなり……」（『制藝綱目』不分卷・四十九葉・「五曰疏」条）。

③情：『舉業卮言』に「文は情に生ずる者なり。情<sup>(3)</sup>暢なれば則ち文佳し。情鬱なれば則ち文苦し。源の發流するが若きは、清濁之に隨う。故に操觚の家凝神（精神を集中する）もて主と爲す。平情（気持ちを平衡にする）之に次ぐ。夫れ情心に生じ、性既に動くの後、之<sup>ゆ</sup>くとして是に非ざる無き」（『呂氏春秋』季春・論人）者なり。之を才に見わせば、則ち才情と曰う。之を思に發すれば、則ち情思と曰う。之を趣<sup>あふ</sup>（趣旨）に溢れさせば、則ち情趣と曰う、之を〔風〕景に布（配置）すれば、則ち情景と曰う。是れ情の物爲る活潑周流す。力を文字に効す者は、甚だ廣し、情平らかならざれば、文字安くんぞ佳きを得んや。然れども情平らかなるの道は、物を絶つ（絶物：相手との交わりを絶つ・『孟子』離婁上）可からず。物を絶てば、則ち空枯にして據る無し。情且に索然（空っぽ・無意味）たり。物に着す可からず、物に着せば則ち凝滯（拘泥）して

（3）『夢雲軒管見錄』に、

文意の合い局の合うと雖も、説き得て暢ならざれば、則ち以て閱る者の心を壓（まんぞく）する無し。故に必ず書理看得徹透なれば、方に能く發揮（際立たせる）し得て出で来る。次は經籍の以て証左を供する有るを要す。次は筆力の以て筋骨（骨組みや構成）に達する有るを要す。自然と氣足神旺なれば、其の旨を曲暢（委細に展開）す。但だ暢は只だ達するの謂い、「多きを貪り得ることを務め」（韓愈「進學解」）る可からず。塗塗附以て暢と爲すが如きなり」（『夢雲軒管見錄』卷七・制藝總論・七葉・「暢」条）。

とある。



化せず。情 且に蕩然（勝手気まま）たり。必ず物に縁りて以て情を生ず。遂物（外物を追求する：『莊子』天下にもとづく）せず以て情を蕩（洗滌）す、即ち喜怒哀樂 人の時に有る所なり、豈に能く念に動かざらん。但だ來りし時は順應し（『朱子語類』卷七十四「物來順應者、簡也」）、過ぐれば即ち消釋す。少しく蒂芥（わだかまり）有りて以て乖戾（不一致）を生ぜしむること勿れ。此の如ければ、情斯れ平らぐ。故に蘇文忠公（蘇軾） 謂う「君子は以て意を物に寓す可し、以て意を物に畱む可からず、意を物に寓せば、微物と雖も、以て樂と爲すに足り、尤物と雖も、以て病と爲すに足らず。意を物に畱むれば、微物と雖も、以て病と爲すに足り、尤物と雖も、以て樂と爲すに足らず」（『寶繪堂記』）と。此れ情を平らぐに善き者なり（『舉業卮言』卷之首・三葉～四葉・「情」条）。

④虚引：『斯文規範』に「引とは乃ち引き起こすの意なり。前面に於いて虚虚として題中の字面を引き起こすを言うなり。以上の三法（虚逼・虚逗・虚引） 名を異にするも實を同じくす」（『斯文規範』卷之六・十七葉・「一曰虚引」条）。

柱を立てるのには、股首に一意を創ったり、一字を拈（つまみ出）したり、一事を提示したりして一股の綱領とする。股中の意義はこれにより、題目の内容から出股（出比）・對股（對比）を立てたり、題目の字面から出股（出比）・對股（對比）を立てるものがある。注からのものもあり、題目の截去された上の部分を用いて立てるものもある。要するに、題目の文字（實）を用いて題目の理を疏し、題目の文字を用いない（虚）で題目の情を引き起こすのである。

さらに、柱を立てなければならないというものの、題目の題情がふたつに分けられる者は少なく、ひとつであるものが多い。そこで、「以一化兩（一を以て兩つに化す）」方法を知らなければ、合掌となってしまうという。そのため、

一意もて兩層に分出する者

一意もて兩層を翻出する者

一層もて兩層を襯出する者

という三つの解法を用いて柱を立てればよいとする。

唐彪 曰く、汪武曹（汪份：字は武曹。江蘇長洲の人。順治十二年〔一六五五〕～康熙六十年〔一七二一〕。康熙三十八年〔一六九九〕の舉人。康熙四十二年〔一七〇三〕癸未科二甲十四名の進士）常に言う、題情 每比ごとに兩意に分かつ可き者 少なく、只だ一意なる者 多し。一を以て兩つに化するの法（以一化兩之法）を知らざれば、對股 必ず合掌の病有り。故に一意もて兩層に分出する者有り①。黃陶菴（黃淳耀：初名は金耀，字は松厓，又の字は蘊生，号は陶菴。江蘇華亭の人。萬曆三十三年〔一六〇五〕～弘光元年〔一六四五〕。崇禎十六年〔一六四三〕癸未科二甲三十一名の進士）の「敬事而信」（『論語』學而）題文の「推此心以敬國家之大事，推此心以敬國家之小事」，吳國華の「在下位不援上」（『中庸』第十四章・第三節）題文の「上援我而我援之」と「上不援我而我援之」の類，是れなり。一意もて兩層を翻出する者有り。魏光國（江西東鄉の人。萬曆三十八年〔一六一〇〕庚戌科三甲七十三名の進士）の「孰能一之」（『孟子』梁惠王上）題文の「以無論諸侯王實競且爭，無間諸敵國實應且憎宋學顯丹之治水也，愈於禹文，以禹治難而丹治易，禹治遠而丹治隘」の分股もて翻すを作るの類の如き，是れなり。一層もて兩層を襯出する者有り，蕭士瑋（江西泰和の人。天啓二年〔一六二二〕壬戌科三甲三百十七名の進士）の「鄒人與楚人戰」（『孟子』梁惠王上）の文の後幅の「臣見今人之所欲類此」・「臣見今人之所求似此」の分股し襯貼①するの類，是れなり。學ぶ者，此の三法を知り，題〔目〕手に到れば，自ずから文情 窘縮（狭苦しい）を患わず，と（『讀書作文譜』卷之九・十葉～十一葉）。

- ①一意分出兩層：『斯文規範』に「題中の止だ一層の意，我 能く其の中に就きて更に兩層に分出するを言うなり。「敬事而信」（『論語』學而）題の敬字は，是れ題中の有する所にして，題中の一層なり。黃陶菴（黃淳耀）の是の題文は却って中に従い，更に兩層に分出し，「推

此心以敬國家之大事，推此心以敬國家之小事」と云うが如し。此れ即ち一意もて兩層に分出するの法なり」（『斯文規範』卷之三・十七葉～十八葉・「一曰一意分出兩層」条）。

- ②襯貼：『斯文規範』に「唐翼修 曰く、凡そ文の襯（際立たせる）有るは、金玉の雕鏤を用うる・綾綺の花錦を装うが如し。日用に益無しと雖も、而れども光彩陸離し、貴重（高位高官）に入らしむは、端まさに此に在り。文章 固より必ずしも襯を用いざる者有り。若し當に襯すべき者を襯せざれば、則ち匡廓（輪郭） 狹小にして、意味 單薄にして、華瞻（華美華麗）の致す無し。但だ襯するの理は一ならず、或いは目の見る所を以て襯す、或いは耳の聞く所を以て襯す、或いは經史を以て襯す、或いは古人の往事を以て襯す、或いは對面を以て襯す、或いは旁觀を以て襯す、或いは上文を牽引し襯す、或いは下意を逆取して襯す、皆な襯貼なり。文を作るに襯貼を知れば則ち文章 光彩を充滿すること、何ぞ言を待たんや」（『斯文規範』卷之六・十九葉・「一曰襯貼」条）。

（つづく）